

# 日本語関係節の派生と節サイズ

嘉藤優太（神戸大学大学院生）

## 1. はじめに

関係節 (relative clause) は、統語論研究において、これまで重要な位置を占めてきた。それは、関係節が統語論における重大な問題である「移動 (movement)」を含むと考えられたためである。英語には、who や which のような顕在的な関係詞が存在するため、関係節化において、関係詞の移動操作が広く仮定されている (Chomsky 1977; 三原 1992 など)。<sup>1</sup> 他方、そのような顕在的な関係詞が存在しない日本語のような言語においても、それに相当する空の (null) 関係詞を仮定した分析が一般的になされている (三原・平岩 2006 など)。

しかしながら、久野 (1973) は数種の経験的事実を下に日本語には空の関係詞及びその移動は存在しないと主張している。また、Murasugi (1991, 2000) は、日本語関係節を CP ではなく TP (Murasugi は IP と表記) と分析している。

しかしながら、本研究は、日本語関係節の節サイズが TP ではなくむしろ CP であること、そして、日本語関係節の派生には移動が関与することを示す。本研究の眼目は、そのようなことを示す新たな経験的事実を提供することにある。そしてその中で、「ことがある」が CP ではなく TP をその補部にとること、及び、「も」に束縛された未確定代名詞の NPI としての認可には局所性の制限があることも、その帰結として示す。

## 2. データと分析

### 2.1. 否定極性項目の認可

本節では、否定極性項目 (negative polarity item: NPI) の認可可能性から、日本語関係節が CP を有することを示す。NPI は Neg 「な」に C 統御されるとき、適切に認可される。<sup>2</sup>

---

<sup>1</sup> 英語関係節において空の関係演算子を仮定する妥当性は、複合名詞句制約 (Complex NP Constraint)、及び、WH 島の制約 (WH-Islands Constraint) に違反するかどうかで確かめることができる (三原 1992)。

- (i) a. the man [Mary thinks [that John met e]]
- b. \*the man [John discussed [the claim that Mary criticized e]]
- c. \*the man [John wondered [who killed e]]

(三原 1992: 88-89)

(ia) から、長距離の (long-distance) 抜き出しが可能であることが示される一方で、(ib-c) から、島の内部からの抜き出しは容認されないことがわかる。これらの事実は、英語では、顕在的な関係詞が存在していない場合であっても、何らかの移動操作が関与していることを示唆する。

<sup>2</sup> 「ない」は Neg 「な」+T 「い」の複合体であるため、本研究は Neg を「な」として示す。

- (1) a. 太郎がチョムスキーの本しか読まなかった (こと)  
 b. 太郎しかチョムスキーの本を読まなかった (こと)

(1a) では、目的語「チョムスキーの本」に付加された NPI「しか」が適切に認可されている。(1b) では、主語「太郎」に付加された NPI「しか」が適切に認可されている。したがって、(1a) は「太郎がチョムスキーの本だけ (を) 読んだ (こと)」, (1b) は「太郎だけ (が) チョムスキーの本を読んだ (こと)」の解釈となる。これは、Neg「な」がそれぞれの要素を C 統御していることによる。

しかしながら、「と」節のような CP が Neg と NPI の間に介在する場合は、NPI の認可は不可能となる (Kishimoto 2007; cf. Oyakawa 1975)。

- (2) ?\*ジョンは [CP メアリーが {本しか/何一つ本を} 読むと] 思ななかった。  
 (Kishimoto 2007: 267)

(2) では、Neg「な」が NPI「しか」を C 統御しているにもかかわらず、非文法的となっている。このような事実から、Kishimoto (2007) は、否定極性項目はそれと Neg「な」の間に CP が介在するとき、認可 (license) されないと主張している (cf. Oyakawa 1975)。したがって、NPI は、CP が介在せず、それが「な」の作用域内となるときに認可される。よって、NPI の認可には局所性の制限があることになる (Kishimoto 2007)。

これを踏まえて、日本語関係節における NPI の振る舞いを見てみよう (関係節のラベルを??で表す)。

- (3) a. 太郎 {が/は} [[<sub>??</sub> 花子しか読んでいない] 本を] 知っている。  
 b. 太郎 {が/は} [[<sub>??</sub> 花子が読んだ] 本しか] 知らない。  
 c. \*太郎 {が/は} [[<sub>??</sub> 花子が読んでいない] 本しか] 知っている。

(3a) では、「な」は「しか」を C 統御し、それらが同一節 (CP) 内に存在するため、NPI は予測通り適切に認可される。(3b) でも、「な」は「しか」を C 統御し、それらが同一節 (CP) 内に存在しているため、NPI は適切に認可される。(3b) の「しか」は主節の目的語「本」に付加しているため、主節内要素であることに注意しなければならない。一方で、(3c) は非文法的である。これは、「しか」が主節の目的語「本」に付加されており、関係節内の「な」の作用域外にあるからである。勿論、「しか」が主節に生じる「な」により C 統御される場合は文法的である。

- (4) a. 太郎 {が/は} [[花子が読んでいない] 本しか] 知らない。  
 b. 太郎 {が/は} [[花子が読んでいる] 本しか] 知らない。

(3c) は, Neg が NPI よりも構造的に低い位置に存在するため, 関係節が CP を有しているかどうかは示さない。関係節が CP を有することを示すには, Neg が NPI よりも構造的に高い位置 (C 統御する位置) に存在した上で, それにもかかわらず NPI が認可されないような事実が必要である。そのようなことを示唆するデータを (5) に示す。

- (5) a. \*太郎 {が/は} [[<sub>??</sub> チョムスキーの本しか読んだ] 少年を] 知らない。  
b. \*太郎 {が/は} [[<sub>??</sub> 花子しか読んだ] 本を] 知らない。

(5) では, 「な」は「しか」よりも構造的に高い位置に存在するため, 「な」は「しか」を C 統御している。そのため, NPI「しか」は認可されてもよいはずである。しかしながら, (5) において NPI は適切に認可されない。このことは, (5) では, NPI「しか」と Neg「な」の間に CP が介在し, それが障壁となっていることを示唆する。(5) において, Neg と NPI の間にはいずれも関係節が存在するため, この関係節がそれぞれ障壁となっていると考えるのが自然である。したがって, 日本語関係節は CP を有していることになる。

ここで, 本研究は, この分析の帰結として, 日本語の「ことがある」という表現がその補部に CP ではなく TP を取ることを示す。「ことがある」はその補部に節的要素を取る。

- (6) [<sub>??</sub> 太郎は統語論の本を {読む/読んだ}] ことがある。

「ことがある」の補部には現在時制及び過去時制が生起可能なので, 「ことがある」は少なくとも TP をその補部に取ることがわかる。ここで, 「ことがある」がその補部に CP を選択しているか考えてみよう。「ことがある」は形式名詞「こと」を含むため, 名詞修飾節「太郎は統語論の本を読んだ」が「こと」の補部であると思われるかもしれない。しかしながら, 本研究は, 「太郎が統語論の本を読んだ」は形式名詞「こと」の補部ではなく, 「ことがある」の補部であると主張する。たしかに, 形式名詞「こと」自体は CP をその補部に取る。

- (7) a. [[勉学に励む] こと] は重要である。  
b. \* [[勉学にしか励む] こと] は重要でない。

(7b) は, 「こと」節内の NPI「しか」は主節の Neg によって認可されないことを示している。しかしながら, 「こと」節内に Neg が存在する場合は, 「こと」節内の NPI は適切に認可される。

- (8) [[(子供が) 勉学にしか励まない] こと] は親にとってむしろ不安となる。

(8) では、「な」が「しか」を同一節内で C 統御しているため、文法的となっている。(7) 及び (8) の事実から、形式名詞「こと」自体は CP をその補部にとることがわかる。

しかしながら、「ことがある」の否定形「ことがない」はその補部内の NPI を適切に認可することが可能である。

- (9) a. 太郎は統語論の本しか読んだことがない。  
b. 太郎は（普段）統語論の本しか読むことがない。

もし「こと」がその補部に CP を取っているとすると、それが障壁となり、その内部にある NPI は適切に認可されないと予測される。しかしながら、「統語論の本しか」は適切に認可されるため、「な」とその間には CP が存在しないことになる。したがって、「ことがある」はその補部に CP ではなく TP を取っているとわかる。このことは、「ことがある」が文法化により CP 領域に存在することを示唆する。

次に、未確定代名詞束縛 (indeterminate pronoun binding) に関する事実から、日本語関係節が CP を有していることを示す。Kishimoto (2001) によると、「何」や「誰」といった日本語の未確定代名詞は、焦点化詞「も」によって束縛され、その作用域に入るとき、NPI として解釈される (cf. Kuroda 1965)。Kishimoto (2001) は、「も」は主要部に付加され、それらが複合主要部 (complex head) を形成するとしている。それにより、「も」はその付加された主要部の最大投射内の未確定代名詞を束縛することができる。したがって、V に付加された「も」は VP 内の未確定代名詞を束縛ことができ、C に付加された「も」は CP 内の未確定代名詞を束縛できると Kishimoto (2001) は主張する (V は主要部移動により v に着地するため、V に付加された「も」は vP 内要素を束縛できる)。

- (10) a. 太郎は何を買いもしなかった。  
b. 太郎は {どこから/どこで} 走りもしなかった。

(Kishimoto 2001: 600)

(10) から明らかなように、目的語や場所句 (locative phrase) といった vP 内に生起すると考えられる要素は「も」により束縛される。したがって、これらの要素は vP 内に存在していることが示される。しかしながら、TP 内要素と考えられる主語や時間句等は「も」によって束縛されない。

- (11) a. \*誰が笑いもしなかった。  
b. \*太郎は {いつ/どういう理由で} 走りもしなかった。

(Kishimoto 2001: 600)

(11) より、主語や時間句は「も」により束縛されないため、それらの要素は TP 内に存在することが示される。

また、Kishimoto (2001) は (12) の事実から、C に付加された「も」は CP 内の未確定代名詞を束縛することができるとしている。

(12) 太郎には [花子が誰を褒めたとも] 思えなかった。

Kishimoto は、(12) の「も」が C「と」に付加されているため、その補部を作用域に取り、したがって、「も」はその内部の未確定代名詞を束縛できるとしている。しかしながら、筆者にとって (12) は容認不可能である。すなわち、「太郎には花子が誰も褒めなかったと思えた」という解釈、及び、「太郎には花子が誰も褒めたと思えなかった」という解釈は不可能であると考えられる。この観察から、本研究は、Kishimoto (2001) とは異なり、C に付加された「も」は CP 内の未確定代名詞を束縛することはできるものの、その未確定代名詞は NPI として適切に認可されないと主張する。すなわち、「も」により束縛される未確定代名詞の認可にも局所性の制限があるということである。これは、「も」により束縛される未確定代名詞が NPI として解釈されるためである。そうすると、(39) の非容認性は、Neg「な」と NPI「誰も」の間に障壁が存在すること、すなわち、CP の介在に起因することになる。

これを踏まえて、未確定代名詞束縛が関係節においてどのように振舞うか観察しよう。

(13) a. 太郎は、[[弟に何を貸しもしなかった] 少女が] 花子であると知った。

b. \*太郎は、[[誰が買いもしない] 本を] 昨日買った。

(13) はいずれも「も」が V に付加されているため、関係節内の vP 内に存在する未確定代名詞を束縛できる。したがって、Kishimoto (2001) の予測通り、目的語が未確定代名詞である (13a) は容認可能であるが、主語が未確定代名詞である (13b) は容認不可能である。

しかしながら、関係節主名詞に「も」を付加すると、関係節内の未確定代名詞は NPI として認可されず容認されない。

(14) a. \*田中教授は昨日、[何を読んでいる] 学生も叱らなかった。

b. \*田中教授は昨日、[誰が読んでいる] 本も捨てなかった。

(14a) において「田中教授は昨日、何も読んでいない学生を叱らなかつた」の解釈、そして (14b) において「田中教授は昨日、誰も読んでいない本を捨てなかつた」の解釈はそれぞれ不可能である。もし、「も」の束縛する未確定代名詞の NPI としての認可に局所性の制限がないとすると、(14) はいずれもそのような解釈で容認可能なはずである。なぜなら、まず、(14) では「も」は主名詞に付加されており、主名詞は関係節内の未確定代名詞よりも構造的に高い位置に存在するため、「も」は関係節内の未確定代名詞を束縛することができる。

そうすると、主節の「な」は「未確定代名詞+も」をC統御するため、NPIとして適切に認可すると予測されるからである。しかしながら、(14)は容認されないため、この事実は、「な」と関係節内の未確定代名詞の間にCPが介在することを示唆する。実際に、「な」が関係節内に存在する場合は、「も」に束縛された未確定代名詞はNPIとして適切に認可される。

- (15) a. 田中教授は昨日、[何も読まなかった] 学生を叱った。  
 b. 田中教授は昨日、[何を読みもしなかった] 学生を叱った。  
 c. 田中教授は昨日、[誰も読まなかった] 本を捨てた。  
 d. \*田中教授は昨日、[誰が読みもしなかった] 本を捨てた。

したがって、本研究は、「も」によって束縛された未確定代名詞のNPIとしての認可可能性からも、日本語関係節がCPを有していると主張する。

## 2.2. 日本語関係節とATB移動

本節では、日本語関係節の派生において移動操作が関与していることを示す。このことは、日本語の関係節内でATB移動(across-the-board movement)の適用が可能であることから示される(cf. Williams 1978)。

Kishimoto (2011) 及び岸本 (2013) によると、相関等位接続された二つの節内の同一の空所はATB移動している。相関等位接続とは、以下のような選言の接続詞「か」による接続のことである。Kishimoto (2011) 及び岸本 (2013) は、このような選言の接続詞はTPを等位接続することができるとしている。

- (16) a. [TPジョンが走ったか] [TPメアリーが転んだか] だ。  
 b. [TPジョンが走りか] [TPメアリーが転びか] した。

(岸本 2013: 16)

また、岸本 (2013) は、相関等位接続された二つの節内の同一の空所はATB移動していると主張している。

- (17) a. 公園へは<sub>i</sub> (おそらく) [ジョンが<sub>t<sub>i</sub></sub>行くか] [メアリーが<sub>t<sub>i</sub></sub>行くか] だ。  
 b. 公園へは<sub>i</sub> (おそらく) [ジョンが<sub>t<sub>i</sub></sub>行きか] [メアリーが<sub>t<sub>i</sub></sub>行きか] する。

(岸本 2013: 19)

(17)において、「公園へは」は二つの等位節から同時に抜き出されているため容認される。しかしながら、一方の等位節からの抜き出しは容認されない。ATB移動の適用を受けられないからである。

- (18) a. \*公園へは<sub>i</sub> (おそらく) [ジョンが<sub>t<sub>i</sub></sub>行くか] [メアリーが学校へ行くか] だ。  
 b. \*公園へは<sub>i</sub> (おそらく) [ジョンが<sub>t<sub>i</sub></sub>行きか] [メアリーが学校へ行きか] する。  
 c. \*学校へは<sub>i</sub> (おそらく) [ジョンが公園へ行くか] [メアリーが<sub>t<sub>i</sub></sub>行くか] だ。  
 d. \*学校へは<sub>i</sub> (おそらく) [ジョンが公園へ行きか] [メアリーが<sub>t<sub>i</sub></sub>行きか] する。  
 (岸本 2013: 19)

(17) 及び (18) より、もし相関等位接続された二つの節内で同一要素が空所となっていれば、それらは ATB 移動していることになる。

それでは、関係節が相関等位接続しているデータを観察しよう。

- (19) a. [[<sub>TP</sub> 太郎が<sub>e<sub>i</sub></sub>読みか] [<sub>TP</sub> 花子が<sub>e<sub>i</sub></sub>書きか] した] 論文<sub>i</sub>;  
 b. [[<sub>TP</sub> 太郎が<sub>e<sub>i</sub></sub>買いか] [<sub>TP</sub> 花子が<sub>e<sub>i</sub></sub>貰いか] する] 絵<sub>i</sub>

(19a) において、[<sub>TP</sub> 太郎が<sub>e<sub>i</sub></sub>読みか] と [<sub>TP</sub> 花子が<sub>e<sub>i</sub></sub>書きか] はそれぞれ相関等位節であるため、Kishimoto (2011) 及び岸本 (2013) に従い TP であると考え。ここで、空所 e は相関等位接続された二つの関係節における同一要素であるため、(19) の空所は ATB 移動していることになる。このことは、関係節においても、一方の等位節のみが空所を持つことができないことから裏付けられる。

- (20) a. \* [[太郎が<sub>e<sub>i</sub></sub>読みか] [花子が小説を書きか] した] 論文<sub>i</sub>  
 b. \* [[太郎が<sub>e<sub>i</sub></sub>買いか] [花子が写真を貰いか] する] 絵<sub>i</sub>  
 (21) a. \* [[太郎が小説を読みか] [花子が<sub>e<sub>i</sub></sub>書きか] した] 論文<sub>i</sub>  
 b. \* [[太郎が写真を買いか] [花子が<sub>e<sub>i</sub></sub>貰いか] する] 絵<sub>i</sub>

(20) 及び (21) に示されるように、一方の等位節のみが空所を持つことはできない。これらの事実から、関係節の相関等位接続においても、(17) 及び (18) と同様の統語的特性を示すことがわかる。すなわち、日本語関係節においても、相関等位接続された関係節から ATB 移動で要素を抜き出すことが可能である。したがって、(19) では、関係節主名詞は ATB 移動の対象となっていることが傍証される。この事実は、日本語の関係節化において、移動操作が関与していることを如実に示している。そして、前節で示したように日本語関係節が CP を有しているとする、この移動先は関係節 CP の指定部ということになる。<sup>3</sup> 以上を踏まえて、(19a) の統語構造を (22) に示す。

<sup>3</sup> 本研究は、主名詞繰り上げ分析 (head-raising strategy) ではなく、演算子移動分析 (operator (Op)-movement strategy) を仮定する (cf. Miyamoto 2017)。

(22) [CP Op<sub>i</sub> [TP 太郎が t<sub>i</sub>読みか] [TP 花子が t<sub>i</sub>書きか] した] 論文<sub>i</sub>

### 3. 結論

以上より、本研究は、まず、否定極性項目の認可可能性を検証することにより、日本語関係節が CP を有することを示した。さらに、相関等位接続された関係節内において ATB 移動が可能であることから、日本語関係節には移動操作が関与することを示した。また、それらの分析の中で、「ことがある」がその補部に CP ではなく TP を取ること、及び、「も」に束縛された未確定代名詞の NPI としての認可には局所性の制限があることも、その帰結として示した。

### 参考文献

- Chomsky, Noam. 1977. On wh-movement. In Peter W. Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian (eds.) *Formal Syntax*, 71-132. New York: Academic Press.
- Kishimoto, Hideki. 2001. Binding of indeterminate pronouns and clause structure in Japanese. *Linguistic Inquiry* 32, 597-633.
- Kishimoto, Hideki. 2007. Negative scope and head raising in Japanese. *Lingua* 117, 247-288.
- Kishimoto, Hideki. 2011. Topicalization and coordination in Japanese. Andrew Simpson (ed.) *Proceedings of 7th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAF7): MIT Working Papers in Linguistics* 62. 171-186.
- 岸本秀樹 (2013) 「日本語の統語構造—相関等位節から見た階層—」『世界に向けた日本語研究』, 遠藤喜雄 (編), 15-43, 開拓社.
- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』大修館書店.
- Kuroda, Shige-Yuki. 1965. *Generative grammatical studies in the Japanese language*. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- 三原健一 (1992) 『時制解釈と統語現象』くろしお出版.
- 三原健一・平岩健 (2006) 『新日本語の統語構造』松柏社.
- Miyamoto, Yoichi. 2017. Relative clauses. In: Masayoshi, Shibatani, Shigeru, Miyagawa, and Hisashi, Noda. (eds.) *Handbook of Japanese syntax*, vol 4. 611-634. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Murasugi, Keiko. 1991. *Noun phrases in Japanese and English: A study in syntax, learnability, and acquisition*. Storrs, CT: University of Connecticut dissertation.
- Murasugi, Keiko. 2000. Japanese complex noun phrases and the antisymmetry theory. Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts, 211-234.
- Oyakawa, Takatsugu. 1975. On the Japanese *sika nai* construction. 『言語研究』 67, 1-20.
- Williams, Edwin. 1978. Across-the-Board Rule Application. *Linguistic Inquiry* 9, 31-43.